

1. コラム「論点提起」：過去・現在・未来や如何

いよいよ新年度が始まった。各種組織体においては、今年度の事業計画等のスタートとなる。こうした事業計画等において、過去に学び(稽古照今)、現在の実態(現実)を見極め、未来への希望をもてる道筋を描くことが計画遂行のモチベーションとその成果を左右する。特に、昨今のように時代が大きく変容しているときには、「未来への希望」に向けたイノベーションが問われる。

しかし、日本の成長が止まった 1990 年代以降、現在に至るも続いている政・官・産・学における不正事案の頻発や「説明責任」の希薄化等、過去に学ばず、現在の実態を直視せず、未来への視座もない状況に遭遇することが多い。一方で、最近、既往組織の枠を超えた個人(群・コミュニティ)としての集まりに参加したときに感じる意識の高さ、未来への希望を感じさせる取組を見るにつけ、日本社会の実態と既往社会システムとのギャップについて、いろいろ考えさせられる。

第一は、「過去」において、確実に到来する未来への対応を怠っていたことである。少子化・高齢化・単独世帯化等は 20 世紀末頃からすでに見通されていた。今になってバタバタしても、人口構造は急には変えられない。結果とした招いた農地・里山の放棄の拡大(結果、鳥獣被害の拡大)、空き家・所有権不明土地の拡大等は今後も確実に増加する。ある意味、破壊型イノベーションの「破壊」が進行中であると認識したソリューションを創発(イノベーション)するしかない。

第二は、「現在」起きていることを直視しないことにある。人口急増時代の仕組みが、人口急減時代に対応し得ないのは当たり前である。人口急増時代に適応した広域大規模集中型のエネルギー・上下水道・廃棄物処理等の施設整備を、人口減少・分散化時代に適した小規模分散型に切り替える必要がある。大量交通輸送対応の公共交通も、小規模デマンドモビリティ対応(MaaS)に切り替える必要がある。市場が急速に変化しているのに現場を直視しない経営戦略が日本品質の信頼性を破壊している。新しい時代に適応する社会・産業システムに実績など無いのは当然で、アジャイル型の導入実践を継続していくしかない。いつまでも、「実験/実証/特区」と称して「導入」を遅らせることは、現実から乖離するばかりであり、ますます世界に劣後するしかない。

第三は、「未来」への希望をどこに見出すかができていないことにある。まずは、国内のリソース価値(再評価)を活かした国内の国際化(特に、ヒト・投資のインバウンド、二重価格制等)である。そして、逆の国際化として、地方企業やスタートアップ企業の海外進出である。いずれも、多様性と国際化をテコとした稼げる地方/国への脱皮である。一方で、足元の地方/地域/コミュニティを維持するためには、補助金に頼らない経済の地域内循環化(サーキュラーエコノミー)による自律を目指すことが不可欠である。その基幹体として、業態を超え、地産地消型のエネルギー・上下水道・廃棄物処理、MaaS 等、地域特性を反映した統合事業運営体の創設が考えられる。

いずれにしても、日本全国で人口が急減し、適疎・過疎化し、独居後期高齢者(要介護者拡大)が大宗を占める時代への流れの中で、国力を維持しつつ、個々人の Well-being を高め、未来に向けて、次代を担う若者層が夢と希望が持てるような社会への仕立て直しが要請されている。そこには、多様性の下での包摂的なハーモナイズと共創が欠かせないが、社会の意識が変わるや如何。